

<演目紹介>

1. マーティン・ホルマン氏によるミニトーク
2. 東二口文弥人形浄瑠璃保存会 ・ ・ 大職冠
3. 深瀬木偶回し保存会 ・ ・ 源氏烏帽子折
4. 徳米座 ・ ・ 夫婦獅子舞ほか

◆「大職冠」のあらすじ (一部)

大職冠とは飛鳥時代の最上位の冠位(官職名)ですが、この位に就いたのは藤原(中臣)鎌足のみであり、後に鎌足自身を指す尊称となりました。しかしこの浄瑠璃では鎌足の活躍は描かれておらず、藤原氏の氏寺である奈良興福寺と香川県「志度の浦」の玉取伝説として既に広く知られていた物語を脚色し創作された、江戸時代初期の古浄瑠璃です。初段から五段に分かれた長い物語ですが、今回は初段と二段の抜粋を上演します。

(あらすじ)

鎌足の娘は唐の高宗皇帝の後となっていた。その唐から奈良の興福寺建立にあたり三つの宝を送ることとなり、万公將軍運宗を使者として日本へ遣わす事になった。それを知った竜宮城の竜王は「面向不背の珠」という宝珠を所望し、修羅王という眷属(神仏の従者)を頼み千倉が沖で待ち構え激戦に及ぶが運宗が勝利する。武力ではかなわないとみた竜王は志度の浦で絶世の美女に化けて現れ色仕掛けで運宗を騙し、珠を奪い大蛇となって海中に消える。(その後三段目以降は鎌足の子である淡海(藤原不比等)が志度の浦の海女の献身により竜王から宝珠を取り戻す場面へと続きます。)

◆「源氏烏帽子折」のあらすじ (一部)

平治二年正月七月のことである。後白河法皇は新春の御慶に際し、大層な喜び様であった。それというのも源氏の大將源義朝が藤原信頼と共謀して天下を転覆しようとして挙兵したが、侍賢門の戦いにおいて平清盛の軍勢に敗退した。義朝は譜代の家来長田を伴ない落ち延びようとするが、主君への忠誠よりも勅命を重んじた長田親子は、三日義朝を婿の鎌田共々討ち取ってしまった。法皇は清盛に中納言、長田に六位の従上を贈位し、朝敵となった義朝に対しても、今までの忠勤をめでて、正二位の位と朱雀寺への埋葬を許可した。また、長田に対し、勅命を重んじたとはいえ、主君の命を討った罪は軽くないとして、夫人の常盤と幼い子供達を探し出して養育せよと命じた。

粗末な家に落ち延びていた常盤には、今若、乙若、牛若の三人の幼い子供達がいたが、

平家の手に落ちることを恐れて今若、乙若の二人を寺に出した。そこへ程なく長田親子が軍勢を引き連れて常盤親子のところへやってきて、二人を罪人同然に引っ立てていった。

一方、藤九郎盛長という男が、源氏が滅んだという話を聞き、義朝の墓を訪れていた。源氏代々の勇士で父を保元の乱で亡くし、幼少より流浪して北国にいたが力強く成長し、十九歳となっていた。

そこで昔寺友達で、ずっと義朝に仕えていた渋谷の金丸丸がやってきた。最後まで義朝に仕えていながら長田を討たずに逃げた金丸丸を、盛長は卑怯者と見ていた。

二人は墓の前で罵り合い、ついには墓をめぐっての争いとなるが、奪い合っていた卒塔婆が真っ二つに割れてしまう。そこで二人は兵としての強さ、主君を思う心を認め合い、打倒平家に意気投合した。

◆夫婦獅子舞と戎舞

夫婦獅子舞は徳米座によるオリジナルの演目。浮気を責められた雄獅子が、雌獅子に許してもらおうとする様子をコミカルに描くきながら、新型コロナウイルスによる苦境を一緒に乗り越え、みんなで一緒に笑い合おうと、邪気払い・無病息災を祈願する。

戎舞は広く伝わる民俗芸能の演目をアレンジ (以下、あらすじ)。

戎さまが、釣竿をかついでやってきました。庄屋さんはお神酒を出します。盃を飲み干した戎さまは、自分の生まれや福の神であることを話しながら舞い始めます。海の幸、山の幸を前に、みんなの願いをかなえようと、お神酒を飲み、幸せを運んできます。

酔った戎さまは、船に乗り、沖に出て、大きな鯛を釣り、メダタシ、メダタシとさらに楽しく舞います。今回は徳米座オリジナルの「マイ えびす舞」として、海に出た戎様には様々な試練が待ち受けており・・・!?

※当事業は、宝くじの助成金で実施する令和3年度コミュニティ助成事業です

